恋慕

植田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋慕

【Ｎコード】
Ｎ２７８５Ｖ

【作者名】
植田

【あらすじ】
小学校の６年間ずっと同じクラスだった男とは一度も話をしたことが無かった。そんな彼と就職先で再会したけど、やはり話す事もなく。そんな彼から突然抱きしめられて…。

第一話

「ねぇ、秋山？　この状況はどういう事かな」
「ん？　そういうことじゃない？」

なぜか私はこの男の胸の中に収まっていた。

この男、秋山涼（あきやまりょう）とは小学校の時、６年間同じクラスだった。その彼と私新条翠（しんじょうみどり）は同じ会社で再会した。入社した時期は違うけど、本当にそれだけだった。だって、彼とはただクラスが同じなだけで、一緒に遊んだり、会話をした記憶はない。二十四歳になってこの時、初めて彼と口をきいた。

定時後に社内で行われた社員全員参加の暑気払いに参加し、私は上の階でトイレを済ませて、会場に戻るために階段を下りていた。そこで階段を上る秋山を見かけたところまでは、はっきりと覚えている。その後はたしか目が合った後、腕を掴まれて階段下の物置みたいな所まで連れて行かれて、そこで彼は体を反転させて、私を抱きしめた。

抱かれなれない男の、腕の中はひどく居心地が悪かった。私の心音が体中に鳴り響く。自分の指先が冷たい。緊張と違和感のせい、か。私は必死に冷静になろうとしていた。

「秋山、抱き付く相手を間違えてない？」
「間違えてないよ」

私の頭に、自分の頬を押し当てるようにして彼は囁いた。私は秋山の体を押し離して顔を見た。彼の真意を確かめるために。彼は真

剣な眼差しで私をまっすぐ見ていた。心臓がドクンと鳴った。この表情で私は勘違いしてしまいそうだった。
すぐに秋山の手によって体を引き戻された。

「間違えてないって」
「やっぱり、状況が飲みこめないんだけど」

話もしたことがないのに、どうしたらこんな事になるわけ？

「そのままを受け止めてくれればいいと思うけど？」

背骨が軋みそうな程、力強く抱きしめられた。
だからそのままを受け止めたらやばいんだって。勘違いしちゃうから。
だって秋山には交際相手がいたはず。腐れ縁の私の親友から教えてもらった情報だ。

「秋山。彼女居たよね？」
「居たよ？　もう別れた」

あれ？　いつの間に…。
ふいに秋山の手が緩んだ。
「あき…」
顔を上げている時に、私の頬に柔らかいものが触れた。
これは、まさか…。
頬に手を当てた。あわてて秋山の表情を見ようとしたけれど、彼は私から離れた後で、すでに手すりに手を掛けて階段を上ろうとしていた。振り返りざまの秋山の顔は良く見えなかった。

「そろそろ戻ったほうがいいね。先に行くよ」

スマートに立ち去る秋山の後ろ姿を見届けた後、赤面している頬を押さえた。

――え？　いつから？

彼は頬にキスをしながら「好き」と囁いた。耳の奥がくすぐったくてじっとしていられなかった。

第二話

秋山と私は同じフロアで働いていた。といってもワンフロアの端と端だから、接点は少ない。彼は企画部、私は経理部だった。

今まで彼の部署を横切る時は、周りの風景なんて気にしたことがなかった。なのに秋山のせいで、企画部というだけで、全神経を張り巡らせながら歩く羽目になった。足が上手く動かない。そして無意識に秋山のデスクを探そうとしている自分がいた。何やってるんだろうな、私。

そして突然体温が上昇した。

――うわ、見付けちゃった。

秋山の姿を。慌てて書類で顔を覆った。彼は私に気が付かずに電話をしていた。

どうにも告白された事が頭から離れず、フロアを通過した後、もう一度秋山を見ようと振り返った。すると秋山も私を見付けた様で、さりげなくこちらへやってきて声を掛けた。

「今日、良かったら食事でも行かない？」

食事だけだったらと返事をした。

一緒にご飯を食べようと思ったのは、私の事を好きだと言ってくれた秋山に、私も少し興味が沸いていたから。

定時後にロビーで待ち合わせをして、駅近くの繁華街へと無言で歩く。何を話したらいいのか分からなかった。

彼と一緒に並んで歩くだけで緊張した。とりあえず、何でも良いから話さなくては。

「秋山とご飯食べるなんて不思議な感じだね」

そうだねと秋山は嬉しそうに笑った。笑い返そうとしたけど、顔

が引きつってしまった。

静かな場所だと緊張して無言になりそうだったから、出来れば人が沢山いそうな居酒屋にしてもらった。

「何飲む？俺はビール飲むけど」

「私も同じもので」

秋山は慣れた様子でビールを頼む。

視線を外してぼーっとしているとメニューを差し出してきた。

「好きなの頼んでいいよ」

「…。」

秋山と二人きりは、やはり緊張する。メニューを見ても単なる文字列にしか見えず、どうにも選ぶことが出来なかった。彼はそれを察したらしく「適当に頼んであげるよ、それでいい？」とオーダーをしてくれた。

低くはないけど優しい声。こんなに落ち着く声だったっけ。子供の時とはやっぱり違う。

ビールがすぐに届き、冷えたジョッキを秋山から手渡された。それを受け取ると、カチンと合わせてきた。

「お疲れさま！」

照れくさそうに笑った彼は、ごくごくと喉仏を動かしながらビールを美味しそうに飲んでいた。それを見て私も一口飲んだけど、味がしなかった。

そして互いに無言で、お通しに箸をすすめた。

沈黙を破ったのは秋山だった。

「新条とは小学校はずっと同じクラスだったよね。覚えてる？」

「覚えてるよ。でも全然話をした事、無いよね」

すると秋山が頭を抱え、がっかりしたように腕を伝って滑り落ちた。そして手首を口元に当て、視線を外しながら彼は言った。

「あのさ、話はした事あるよね？　覚えてないの？」
心当たりがなかった。当時の彼は結構子供っぽくて、男の子の中でも小さくて元気でワンパクな印象しかない。
「その表情からして、本当に覚えてないんだ」
「あ、うん。ごめん」
なんとなく、ビールを一口飲んだ。
「俺は覚えてるよ？　新条さ、俺を助けてくれたじゃん。何度も」
「…え？」
助けた？　私が？　秋山を？　頭の中は疑問符だらけになった。
丁度サラダが運ばれたので、それを取り皿に分けながら私は必死になって思い出そうとしていた。
本当に覚えてない。というか何も思い出せない。思い出そうとすると顔がなぜか歪んでしまう。取り分けた小皿を秋山に渡す。
「それって本当に私なの？」
はにかむような表情を見せた後、秋山は教えてくれた。
「俺、三年の時クラスでいじめられてたんだよね。その時、新条が助けてくれてさ。あの時は嬉しかったな」
顔を赤らめながらサラダを口に放り込んでいた。
私は青ざめた。全くもって記憶にないんですけど。彼は嘘でも言ってるのではないだろうか。
「何その顔…、本当に覚えてないんだね」

私が首を傾げていると、秋山は青ざめた様子で身を乗り出した。
「じゃあさ、俺が校庭で遊んでて膝を切って痛くてわんわん泣いてた時に、走ってきて保健室に連れて行ってくれたことは？」
そんなことあったっけ？
うーんと唸りながら首を横に振った。
「え？　じゃあ俺が曜日を間違えて一日分の教科書を丸ごと間違えて持ってきた時に、机をくっつけて来て『見せてあげるよ』って言

ってくれたことは？」
「…あー、そんな事もあったかもね」
私にとって些細な事ばかりなので、対して記憶に残っていなかったようだ。
脱力しながら秋山は椅子にもたれた。
「そーなんだぁ。そっか。そんな程度だったんだ、俺の存在なんて」
悲しそうにビールを飲み干した。私は申し訳なさで一杯になり、秋山の事を何でもいいから思い出そうとした。眉間にしわをうんと寄せて。
「あ、一つ思い出した」
何なに？と秋山は嬉しそうに顔を上げた。
「秋山ってさ、五年生くらいあたりから結構モテてたよね」
「嘘！　何それ、俺知らね！」

秋山が昔のような表情を見せた。それを見たら私の緊張はほぐれて、昔話に花が咲いた。秋山が私の事をそんな風に覚えていてくれたなんて。なんだか嬉しくて心が温かくなった。

第三話

「新条、大丈夫か？」
「ごめん、大丈夫じゃないかも」

遅くなるからそろそろ帰ろうと秋山に言われたけど、気分が悪くなっていた。はじめに緊張しすぎてそれを誤魔化すかのように、お酒を飲み過ぎたのが原因だった。
お店からちょっと進んだ先で私はしゃがみこんでしまった。

「帰れそうか？」
首を横に振るのが限界だった。体から血の気が引いて、手足が冷えていくのが分かった。
やばい。秋山に迷惑かけるつもりなかったのに。
「家って、実家？」
頷いたら、更に具合が悪くなってきた。
「地元か、ちょっと遠いな。俺は一人暮らしで五駅先に住んでるけど、連れて帰るわけにもいかないしな」
秋山は周辺を見渡した後に、しゃがんで私と同じ目線になった。
「タクシーで帰れそう？」
「長時間は車に乗れない…」
私は顔面蒼白になりながらも、このあたりにビジネスホテルが無かったかと懸命に頭を働かせた。
「ホテル…ホテルに泊まる」
私の言葉に、一瞬秋山が固まったような気がした。
「ごめん、秋山。ビジネスホテルまで連れて行って？」
見上げると、秋山は既に立ち上がって顔を横にそむけながら口元を覆っていた。そしてすごく深い溜息をつかれたのが聞こえてきた。
「わかったよ」

二の腕を掴まれ、立ち上げてくれたのは助かったけどその行動のせいなのか、急激な貧血が起きていた。朦朧としていてその後の事は、何も覚えていなかった。

夜中に目が覚めた。
「う、吐きそう」
「待て、トイレはこっちだ」
ぐっと引き寄せられるようにトイレに連れて行ってもらって吐いた。
うう、辛い。涙が出た。こんなに気分が悪いのは久しぶりだった。
背中を大きな手でずっとさすられている事に途中で気が付いた。シャツを肘まで折り曲げて、もう片方の手で私を支えていてくれていた。
「あれ？　秋山…うっ」
「吐けそうなら全部出しとけ」
げほげほと咳き込みながら、胃の中が空っぽになるまで吐いたら楽になった。
「うがいしたらこれ飲みなよ」
スポーツ飲料を手渡された。口の中をすっきりさせたあと、秋山の傍に腰かけた。ぱきっとペットボトルの蓋を開け、一口飲んだ。冷たいものが喉から胃までサッと走るのを感じた。お蔭で頭もすっきりし、ここが見慣れない場所だった事に私はやっと気が付いた。

「あれ？　ここどこ？」
秋山が呆れたといった様子で、首を振っていた。
「お前、本当に覚えてないの…？」
周りを見渡すと大きな鏡が私たちを映していた。そこには大きなベッドが一つ置かれて、私と秋山はそこに腰かけていた。

思わず口元を手で隠した。
「う…そ。ここって、ラブホテル？」
「お前がすぐにでも横になりたいって、ここに入るってきかないから…。俺は正直びっくりした」
「やだ、全然覚えてない…」
秋山が何も言わずに視線を落とした。私は自分の行動に呆れてうつむいた。

「新条ってさ、もしかして酔っぱらうといつもこうなんじゃ…」
「ち、違うわよ！　こんなに酔ったのは今回が初めてだし。それにラブホテルも初めて入ったし…」
って、何暴露しちゃってるんだろう私。恥ずかしさのあまり耳を押さえた。
黙り込んだ秋山は、いつの間にか私を見ていた。
「な、何？」
「もしかして、俺に何か期待してる？」
「え？　期待って…？」
んなわけないか、と秋山はベッドに横になった。

横になった秋山に視線を送った。シャツ越しに胸板のラインが見え、厚みを感じた。腕も昔と違ってがっしりしていて子供の頃とは全く違う体型をしていた。
私の視線に、秋山が気が付いた。

「顔色、良くなったね」
私の目を見つめたまま、私の頬に手を伸ばしてきた。

私は息を飲み、思わず話をすり替えた。
「秋山はどうして彼女と別れたの？」
私は雰囲気を壊すことは得意だった。そんな雰囲気に持っていく

方法は知らないけど、持って行かないようにするための手段なら何となく知ってる。だけど私がどんなに雰囲気を壊してもきっと秋山には敵わない。

秋山の手が止まった。

「忘れられなかったから」

ゆっくりと体を起こして、私の頬に触れた。その瞬間息が止まる。

「…新条の事」

顔を近づけ、唇を重ねてきた。

突然の出来事に私は目が真ん丸になった。

びっくりした。いや、びっくりしない方がおかしいかもしれない。

「秋や…」

息を吸った瞬間、口の隙間に異物の様なものがするりと入りこんできた。それは私の舌の上に乗っかり、表面をなぞってきた。

「ふ、う！」

ぐっと唇を塞がれ、肩を抱き寄せられた。意識があっという間にうねる舌の動きに集中した。

秋山の力は強かった。秋山は唇を離さない様にゆっくりと私の肩に体重を乗せてきた。私はベッドにそのまま横たわった。私の両腕を抑え込まれて、さらに深いキスをされた。手を振りほどこうと懸命に動かすとシーツのこすれる音がやたらと耳に付き、私はベッドの上にいるのだと認識させられ、突然危機感が沸いた。無理やり顔を左右に振って抵抗した。

「ちょっ…と」

すると今度は首筋を捉え、吸い付く。それは愛しそうに、丁寧に愛撫する。その動きで体が熱くなった。そしてまた唇へと戻ると、片方の手が私の体を滑らせなから、胸へと進んできた。

こういった経験のない私にはこの雰囲気自体が限界だった。

「い、いやっ」

私の叫び声で秋山の手が止まる。

「…ごめん」

嫌…。

嫌じゃなかった。秋山とのキス。

だけど秋山が急に男に見えて怖かったのは確かで。

第四話

あれから秋山は私を避けるようになった。原因は私。
避けられて初めて分かった。私は秋山の事を完全に意識している。
だけど普通に話しかける事ができなくなっていた。
時々目が合っても、互いに視線を逸らす様になった。

目は自然と秋山を探すようになっていた。
秋山が、他の女子社員と親しげに話している姿を見かけた。笑っ
てる。彼女たちには笑いかけるのに、私には笑いかけてくれないの？

心がぐちゃぐちゃになってきた。それはとても不愉快だった。そ
れが私のわがままだとわかってはいるのに。

秋山が社員食堂で女子社員と一緒に食事をしている姿を見たら、
地面が柔らかくなった気分になった。立ってられない。食欲もなか
ったから昼食はやめて、ふらふらと通路を出た途端、貧血が起きて
しゃがみこんでしまった。

「新条？　大丈夫？」
突然の秋山の声。聞きたいと思っていたはずの声を、今聞くと頭
の中がぐるぐるまわる。
顔を見上げると女子社員も居た。気を使ってか、少し離れたところ
に立っている。
そっと腕を掴まれた。心臓が跳ねた。条件反射でその手を払いの
けた。意識とは反して。

しまったと思い、顔を上げると秋山は苦笑していた。

「嫌われたもんだな」
もう話しかけないよと、秋山は私に背中を向けて歩いて行ってしまった。
私には追いかける勇気がなかった。ゆっくりと立ち上がり、私はトイレの個室に入り、蓋の上に腰を下ろした。流れ出る涙を必死に堪えていた。
もういやだ。なんなのこの気持ち。喉が締め付けられるような苦しさで呼吸すら上手くできなくなっていた。

☆　★　☆

いくら日が経っても、私は秋山の姿を探すことがやめられなくなっていた。見たくないのに探してしまう。女子社員と楽しそうに話を見ているのを見るのが辛かった。
ある日、通路の先に秋山がいた。視界に飛び込んできた瞬間、体が重たくなるのを感じた。私は書類を抱きしめ、うつむきながら歩いた。しっかりと歩くことはできなかったけれど、一歩一歩、重たい足を持ち上げながら前へ進む。すれ違う瞬間は息が止まりそうだった。意識しすぎて呼吸すらできなくなるなんて。
「新条」
思わず振り返ってしまった。彼の声だったから。秋山はいつもの笑みは無く、ただ静かに不愉快そうな表情をしていた。それを見た瞬間私の顔はこわばり、体が震えた。

腕を掴まれ、会議室に押し込まれ、扉を閉められた。私は思わず握っていた書類を足元に落としてしまった。
慌ててその書類を拾おうとしゃがむと、伸ばした私の手は震えていた。悟られたくなくて手を引っ込めた。喉がくっつく様な、焼ける様な苦しさが込み上げる。
「…新条、そんなに俺の事、嫌いなんだ？」
触れられた肩が熱い。違うって言いたいのに言葉がでない。
「泣くなって」
私はただ首を横に振る事しかできなかった。
「俺、さ。あの日の事、謝りたくて」
あの日？　あの日ってなに？
秋山は私が落とした書類を拾いながら言った。
「嫌がる新条に無理やりキスとかしてごめんな」
はい、と書類を渡した後、秋山は会議室を出ようとしていた。

「ま、待っ…」
行かないで。
そう言いたいのに、涙が、悲しさが喉から言葉を発するのを邪魔して上手く言えなかった。私はそのままへたり込んで泣いた。
ふと男性用のハンカチが視界に入ってきた。見上げると秋山だった。ハンカチを暫く見つめた後、恐る恐るそれを受け取った。
「何？　今、俺の事呼び止めたでしょ」
冷たい声にどきりとして、握るハンカチに力が籠った。

「秋山は私の事、好きなの？」
違う、私はこんなことを言うつもりじゃなかった。視線だけを秋山に送ると複雑な表情を見せ、答えてくれなかった。

背筋が凍った。
――やっぱり嫌われた。

思い上がり。自業自得。自意識過剰。自分を責めたてる言葉が脳裏によぎる。
そして心の中にどす黒いものが渦巻き始めた。
「ねえ…私の事、好きなんだよね？」
「何で今更それに答えないといけないの？」
「答えてよ！」
私は秋山の胸をどんと叩いた。何度も何度も。秋山は叩かれたまま何も言わない。答えてくれなかった。秋山が私の腕を掴もうとしていた。
「他の女の子には、優しく笑うくせに。嫌いだったら嫌いって言ってよ…」
秋山の袖をぎゅっと握りしめた。
「…んで、なんで私の前に現れたのよ。私の心をかきまわさないで！　もうやだ…私ばっかり、どうしてこんな思いしなくちゃならないのよ。馬鹿、秋山なんて嫌い！」
今の私は最低だ。もう嫌、私の口。誰か何とかして。
「嫌い…」
秋山が静かに抱きしめた。その肩に顔を埋めた。
違う。
「…好きすぎて苦しいよ」
秋山のスーツを力一杯握りしめた。ずっと喉に引っかかっていた言葉が、やっと言えたら途端に涙が止まらなくなった。
「うー…」
私が泣き出したら秋山はぎゅっと抱きしめてくれて、そして落ち着かせるように背中をとんとん叩きだした。私の泣き声が、叩かれる度に弾み出した。それを聞いていたら私はおかしくて泣きながら笑い出してしまった。

「やだ、子供をあやしてるみたいだよ、それ」
やっと秋山の体から離れることが出来た。私は言いたいことが言えてすっきりした。
「秋山？」
「ん？」
「困らせてごめんね。ハンカチは洗って返すよ」
私は微笑むことが出来た。書類を拾って私は立ち上がった。秋山はしゃがんだままだった。

嫌われてるのに、今更告白したってもう遅いのは分かってる。けれど私の気持ちは晴れ晴れしていた。
会議室を出ようと扉に手を掛けようとした瞬間、私の手元からまたしても書類が零れ落ちた。
右の二の腕を掴まれ、一気に体を反転させられ、秋山が唇を重ねていた。私は驚いたけど、離したくなくて秋山の首に絡み付いた。

「秋山。好き。す…」
好きって何度も言おうとしてるのに、何度もキスをして阻まれた。
「言わなくていいよ。もう十分伝わってるから」
私の腰に手を回してぐっと引き寄せられた。私の耳元にキスをしながら彼は言った。
「俺、嬉しすぎて死んじゃうかも」
嫌われてると思ってたからと、耳元で囁いた後に彼は火照った頬を私の冷たい耳に押し当てた。
「死なせないから、安心して」
半ば本気で私は答えた。

第四話（後書き）

寝ぼけまなこで書き上げて投稿してしまったので
誤字脱字等が本当に凄かった。
恥ずかしさのあまり、慌てて引き下げてほったらかしては直してみたり。
文才が無いので手直しも限界…。

お気に入り登録と評価をして下さった皆様、有難うございます！
嬉しかったです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2785v/

恋慕

2011年10月9日06時36分発行